
しろつめ草

愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しろつめ草

【Nコード】

N4487B

【作者名】

愛

【あらすじ】

好きな人がいる。私は貴方の香りが大好き、でも今はその香りが私を苦しくさせる。甘く切ない、まだ子供だったころの私と貴方。

好きな人がいるの。

その人は男なのに色っぽくて、なのに無愛想で全然優しくない。でも、冷たい人じゃない。心の奥深くにはあったかいものが棲んでいる。

保健室に通い続けて、なんとなく分かったよ。

初めて会ったときは確か今から一年前。
私の一目ぼれだった。

それからどうしても私に振り向いて欲しくって、わざと怪我をするようなことをした。

さすがに怪我ばかりしてたら自分の身がもたないって気付いて、本当に我ながら馬鹿だったと思う。

それでも一時間おきに通い続けてたから、さすがにうんざりとした顔をされたっけ。

でも、安心していいよ。

もう私ここに来ないから。

やっと私から解放されるよ、良かったね。

「マイ」

私を呼ぶ声がして、後ろを振り向く。

そこには貴方が立っていた。

運動場からは野球部の声が聞こえる。窓から夕日が差し込んで、少しまぶしい。

私が目を細くしていると、いつの間にか貴方は私の目の前にまで来

ていて、見上げれば貴方は険しい表情をしていた。

「どうしたの、怖い顔して」

「何で言わなかった」

私の言葉を完全無視してそう呟いた。

いつもよりも低い声に、少し肩をすくめる。

そう、この人は怒るとすごい怖い人だった。

黙っている私に、貴方は舌打ちをして私の腕を乱暴につかんだ。
連れてこられた先は保健室。

保健室独特の薬品のおいがする。

それに少し混じって、貴方の良い匂いがする。

ああ、私重症かもしれない。

「何で言わなかった」

同じ台詞をまた私に投げかける。

私はいつもの席に座りながら口を開く。

「どうして言わなきゃいけないの？」

きつと思いがけない言葉だったんだろう。

保健室に沈黙ながれる。

ちらりと彼を見ると、難しい顔をして私を見ていた。

きつと彼にあんな顔をさせられるのは、この学校で私一人だけだろう。

そのことが私を優越感に浸らせた。

「だって貴方、私に興味ないじゃない」

貴方は何も言わない。
かまわず言葉をつなげる。

「毎日通ったってかまってくれないし、最近無視だし。私の気持ち分かってるっていうのに、悪趣味だね。だから私がいなくなったほうがいいでしょ？ いなくなっただけいいでしょ？ そうなんでしょう？」

自分で言っただけ悲しくなってきた。

そう、もうここには来れないの。

それに対して貴方は何も感じないんでしょうね。

私はこんなに胸が締め付けられるっていうのに。

「…ああ、そうだな、いなくなっただけいいよ」

分かりきった言葉、でもなんでこんなに苦しいのだろう。

少しは期待していたのかもしれない。

そんな事ない、そう言ってくれてるって思っていたのかもね。
馬鹿よね。

「でも、何かが足りなくなるんだろうな」

うつむいていた顔を貴方のほうに向ける。

貴方は寂しそうな笑みを浮かべていた。

「いつもは煩くってうぜーけど、いなくなっただけで静かすぎるんだろうな」

私は何も言えなかった。

「で、どこに引越すんだ」

いきなりの問いに私はあわてて答える。

「北海道……」

「遠いな」

「…うん」

「帰ってくる予定は？」

「ない」

「へえ」

相変わらず寂しそうな目で私を見る。

そんな貴方を見るのは初めてだ。

でも、意地悪な人。

思わせぶりの言葉を言っておいて、私が一番欲しい言葉はかけてくれないのね。

でも、これが貴方だよ。

こんな貴方だからこそ、私は好きになったんだよ。

「ねえ」

私は椅子から立ち上がる。

「好きだよ」

短い沈黙のあと、貴方は知っていると答えた。

私はそんな貴方に苦笑を浮かべながら、そうだろうねと言う。

もうこんな時間は訪れない。
次に会うときは、貴方は三十代に入っていて、私は大人の女性になっ
っているだろう。

それでもきつと私の想いは変わらないんだろう。

「私、綺麗になるよ。大人の女になるよ。今みたいに子供じゃないよ。身体も心も、全部大人になるよ」

——だから

「また会ってくれる？」

貴方はいつもの口元をつり上げたいやらしい笑顔で私を見ていて、私もなんだか笑ってしまつて、そこに言葉は無かつたけど、それは無言の肯定だと勝手に決めて、机の上にある自分のカバンを手にとつてドアに向かった。

これでお別れだね。

また会おうね。

忘れないでね。

いきたくないよ。

静かに、ほほに涙がつたつた。

最後に貴方の姿を焼けつけておきたくつて振り向いた。

いつもの場所に貴方は座っていて、いつも通り私のことを見て、でもその目がどこか寂しそうで。私の気のせいかもしれないけど、気のせいじゃなかったらいいな。

「バイバイ、先生」

嗚呼、身体に染み付いたこの保健室の独特のにおいが、また私を悲しくさせる。

（後書き）

しろつめくさ
花言葉：約束

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4487b/>

しろつめ草

2010年10月11日00時46分発行